

## 訳者あとがき

本書は「九州キリスト教社会福祉研究所」(中津市「いずみの園」)の5人の研究会の中から生まれ、2002年から2007年まで長崎ウエスレヤン大学紀要に掲載された。

著者E. バイロイター(1904-2003)はドイツ敬虔主義と信仰覚醒運動の研究者であり、エアランゲン-ニュルンベルク大学で教会史の教授を務めた。

本書を三部に分けると、1. 宗教改革までのキリスト教社会福祉、2. ドイツ内国伝道を創設し、「ディアコニー」を形成し、主にJ. H. ヴィヘルンからボーデルシュヴィンク、そして3. 戦中の苦難、戦後の復興と開発途上国援助への道をたどる。特にM. ルターが唱えた全信徒祭司制(万人祭司制)は、内国伝道のディアコニーにおいて実質化したと見る。この意味でヴィヘルンの貢献は大きい。また、畑の納屋で身を寄せていたてんかん病の少年を引き受け、またディアコニッセ養成を始めた施設「ペーテル」は戦前・戦中・戦後を通してディアコニーを一貫して展開してきた。またボーデルシュヴィンクの子フリッツの時代、ヒトラーの安楽死から患者を守り抜いた施設として世界に知られている。

「内国伝道」と「ディアコニー」の視点から、歴史を初代キリスト教にさかのぼり、現代に至るまで記述した本書は、「ドイツの社会福祉の歴史」に関する基本的なテキストとして評価されている。

困難な出版事情の中で、印刷製本を「昭和堂」に、また「ゆりり書房」にISBN関係の事務をお願いできたことを感謝します。ヴィヘルン社との翻訳出版の交渉が滞っていた時、鎮西学院高等学校留学生ヨハネス・オルポルト君がメールと電話で交渉していただいたことを感謝します。「九州キリスト教社会福祉研究所」のみなさん、特に指導者多田一三氏、わからないところを懇切に教えていただいた西南学院大学教授河島幸夫氏、ラテン語については関西学院大学教授木ノ脇悦郎氏に教えていただいたことを感謝します。